■聖書：ヨシュア記1章5-9節　■説教題：『ただまっすぐに』
■中心聖句：ただ強くあれ。雄々しくあれ。わたしのしもべモーセがあなたに命じた律法のすべてを守り行うためである。これを離れて、右にも左にもそれてはならない。あなたが行くところどこででも、あなたが栄えるためである。　ヨシュア記 1章7節

1. はじめに

新年度、新しい生活が始まった方も多くおられます。目標を立て、その実現のためにはどのような道筋でいくのかということが大事になってきます。

2. 繰り返し語られる「強くあれ」

モーセの後継者として立ったヨシュアでしたが、彼が引き継いだ使命は、神の民を導き率いて、約束の地に入るということでした。前回ヨシュア記を開いた時には彼の人となりを探りましたが、民数記13章に約束の地の偵察隊の一員としてヨシュアが名を連ねています。彼はこの時エフライム族の族長で、おそらく40歳くらいにはなっていたのでしょう。同じ偵察隊にいたカレブが、この時40歳だったと振り返っていますからおそらく同年代だろうと想像されるのです（ヨシュア記14:7）。そしてその後、イスラエルの罪のために荒野での40年があったことを考えると、今このヨルダン川を目前に立つ彼は、80歳を越えていたことになります。当然のことですが、かつての若者も歳をとり、さらにずっと先頭に立って民を導いてくれていたモーセが死んでしまったのですから、体の不調だけでなく、気落ちすることもあったことは想像できます。だからこそ、主は何度もヨシュアに対して「強くあれ」と語られるのでした（6,7,9）。しかし、この6節の言葉をみなさんはどう聞くでしょうか（6節）。神様はずいぶんひどいんだなぁと思われるでしょうか。もっと別の若い人、ふさわしい人を立てればいいのにと思われるでしょうか。「強くあれ、雄々しくあれ」言い換えれば「勇気を出して困難に立ち向かえ」。それが簡単なことではないことを私たちはよく知っています。日々抱えている事柄の大変さ、あるいは自分自身の弱さを知っているからこそ、このようなことばがひどくプレッシャーになってしまうことがあります。震災の時、だけではありませんが、さまざまな課題を抱えている人に対して「頑張って」という言葉がどれだけ重荷になるのか、相手を傷つけるのかということはよく言われています。もう十分頑張っている、強くあろうとしてもがいている。そんなときに投げかけられる言葉に、心がえぐられてしまうということだってあるのです。

けれども神様は無理矢理にこの大役を押し付け、さらに強くあれと気軽に命じているわけではありません。前後しますが、5節にはこの「強くあれ。雄々しくあれ」と命じられていることの理由として、一つの約束が示されています（5節）。「わたしはあなたを見離さず、あなたを見捨てない」。決してヨシュア一人にこの責任を押し付け、突き放しているわけではないのです。あなたが慕い、尊敬し、従ってきたモーセに対してもそうであったように、わたしがあなたとともにいて、あなたを一人にはしないと神様は言われるのです。肩を組んで、手を繋いで、でしょうか。いや、「だれ一人としてあなたの前に立ちはだかるものはいない」と言われていますから、むしろ神様が私たちの前に立って進んでくださるというイメージでしょう。神様から目を離し、神様を忘れてしまう時、自分の力ばかりに頼っている時には、私たちは目の前に立ちはだかる問題・課題に恐れ、一歩を踏み出すことをためらってしまうものです。心配が大きく臆病になり、ついにはしゃがみ込んでしまう。でも神様は「誰ひとりあなたの前に立ちはだかるものはいない。…わたしがともにいる」だから「強くあれ。雄々しくあれ」と言われるのです。これは本当に大きな励ましではないでしょうか。

だれ一人として立ちはだかる者はないと語りかけられていることばを聖書全体から聞くならば、ヨシュアや民だけでなく私たちすべての人の最大の敵である「死」さえもここには含まれると言って良いでしょう。インマヌエル（「神が私たちとともにおられる」）であるイエス様は私たちの身代わりとなって十字架につけられ、私たちの罪のためにその血を流され死なれました。私たちを罪から解き放ちご自身の元へ取り戻すために、罰を全て引き受けてくださったのです。そして三日目によみがえられ、死に勝利された。最後の晩餐で弟子たちに語りかけられた言葉の最後はこうです。16:33「**これらのことをあなたがたに話したのは、あなたがたがわたしにあって平安を得るためです。世にあっては苦難があります。しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝ちました**」。すぐ前には、もう一人の助け主である聖霊が来られることを約束し、「**わたしはあなたがたを捨てて孤児にはしません。あなたがたのところに戻って来ます**」と約束されたイエス様が世にあっては確かに苦難がある

ことを認めた上で、「**しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝ちました**」と弟子たちを、そして私たちを励ましてくださるのです（ローマ8章35-39節）。

3. 約束の地に入るために必要なこと

このように「強くあれる、雄々しくあれる」理由として、ご自身がともにいてくださるとの約束を与えてくださった神様ですが、今度はこれが理由となって一つの道が示されています（7-8節）。7節を素直に読むならば、神のことばのすべてを守り行うために、「強くあれ、雄々しくあれ」と言われていることに気づきます。神のことばに従うためには、勇気がいることなのだと言い換えても良いでしょう。約束の地というゴールを目の前にした時、目標がいよいよはっきりとしたとき、具体的な道筋を私たちは考えます。いわばどのようにしてその目標を達成するのか、それはとても大切なことでもあります。ただし私たちは時に、その具体的な方法ばかりに心が奪われてしまい、勇気をもって「神のことばを守り行うこと」をおろそかにしてはいないでしょうか。もっと言えば、自分で筋道を作ってから、申し訳程度に神のことばに聞くということをしてはいないでしょうか。

説教の備えをする際によくよく注意しなければいけないこととして言われるのは、自分の語りたいことがあって、そのためにみことばを利用するようであってはならない、というものがあります。これは当然のことですが、しかしそのようになってしまうことが本当に多くあるのです（ですから説教者のためにお祈りください）。語りたいことありき、ゴールありきではなく、まずその日のみことばの前に静まり、へりくだり、みことばから聞くということが求められているのです。同じように一人一人が持つ目標、大きな意味では人生がどこに向かっていくのか考える時も、まずみことばが何を求めているか、神様が何を願っているのかを聞くことから始めたいと思うのです。また、神様のことばも大切だけれど、時代も変わっているんだし今のやり方も取り入れなければやっていけないとの誘惑もあります。まるでみことばでは不十分であるかのように、右を見て左を見て、あっちにフラフラこっちにフラフラしていることはないでしょうか。真剣にこの教えを考えるならば、とても勇気のいることだと気づくでしょう。世の常識、社会の価値観にとらわれず、神のみことばを第一とする生き方というのはたくさんの衝突を生みます。山の上にある町の光が隠れることができないように、どうしたってそれは暗闇の中で目立つのです。目立たないのだとしたら、その光を隠して、この世と調子を合わせてしまっているのかもしれない。それは確かに衝突はない楽な生き方かもしれませんが、そこには神様が与えようとしてくださっている祝福はないのです。

ヨシュアに対して神様が言われた命令にはいつも約束が伴います。「強くあれ、雄々しくあれ」の命令には「わたしがともにいる。見離さず、見捨てない」との約束がありました。「命じられた律法のすべてを守り行い、神のことばを離れて右にも左にもそれてはならない」という命令には、「あなたが行くところどこででも、あなたが栄えるためである」との約束があります。これは8節でもことばを変えて繰り返されていることですが、そうやってたどり着いたところにこそ本当の栄えがあるんだ、祝福があるんだということになります。これもやはり一人ひとりが問われなければならないところです。私たちが目指す「栄え」がこの世のものだったら、この世の価値観で生きる時に得られるものでしょう。世の成功をおさめ、地位や名誉や財産、良い学校、良い社会的立場を獲得する。もちろんこれらが悪いわけではありませんが、しかし、一瞬にして全てが無くなってしまう栄えを求めるだけでしたら、それは最後の敵の前には何の意味ももたない、むなしいものです。確かにそうやって栄えているように見える人はたくさんいます。決して褒められないようなやり方でも、それでも財産があれば成功だとしてしまう世の価値観もあります。そんななか、愚直なほどにみことばに従い続けるというのは馬鹿を見るかもしれない。世からは評価さないかもしれない。それどころか迫害され命を失うことさえある。しかし私たちが目指す、約束の地、神の国の栄光は、そんなもので奪い去られるものではないのです。「決して見放さず見捨てない」と約束してくださるお方からは、死であったとしても私たちを引き離すことができません。どんなに暗い現実の中にあったとしても輝き続ける栄えが用意されているのです（詩篇1篇）。

4. おわりに　ただまっすぐに

時代が変わり、私自身が変わっても、決して変わらないお方が共におられ前を進んでくださるのですから、私たちもこの変わらないことばに信頼し、勇気をもってまっすぐに従ってゆきましょう。